寛永二年の豊後国曲村検地について

外園豊基

はじめに

渡辺澄夫先生ご所蔵の寛永二年(一六二五)の曲村検地帳を拝見し、筆写させて頂いたのはずいぶん以前らのことであった。文禄二年(一五九三)の同村の検地帳とともに、いつかは活字にし考察を加えようと思っていながら今回に到っている。ところが最近になって文禄二年の検地帳を佐藤満洋氏が活字にされ、さらに詳細な考察を加えられていることを知った。[1] 佐藤氏は文禄二年の検地帳に綿密な検討を加えられ、曲村の様相を明らかにされた。

そこで小稿では、佐藤氏の玉稿に導かれながら寛永二年の曲村検地帳の検討を行うことにする。

文禄二年より三二年後の検地帳の分析を試みることにいかほどの意義を見い出だせるのか心許無い。豊臣政権下の文禄検地と徳川政権下の寛永検地とではその性格が大きく異っているのは当然のことである。とくに豊後国の文禄検地は他地域とは異なり特殊な様相を呈している。[2] この間、恐らく慶長検地も行われていると思われるが、残念ながら同村の検地帳の存在は知られていない。しかし、慶長一三年(一六〇八)の検地高が四八二石余、ということは知られている。[3]

豊後国における文禄検地の際の検地奉行は明らかであるが、寛永検地においての奉行は明らかではない。

一、寛永二年の検地

まず、検地帳の表紙および次頁には次の如く記されている。

寛永弐年
曲村之御検地　野帳
九月吉日　　枚田作左衛門
　　柳川勘□

中ノ村

上田壱石三斗代

中田壱石壱斗

下田九斗

上畠壱石

中畠八斗

下畠六斗

屋敷壱石代

「曲村」とだけ記されていて、豊後国・大分郡・津守村などの名称は見あたらないので、文禄二年の曲村と同一かどうかの確証はない。しかし、豊前・豊後における「曲村」は大分郡内の一村だけであり、検地帳における小字（こあざ）や名請人なども一致するところが多いので、同一の村と考えても支障ないと思われる。

それでは、佐藤氏の検討方法に学びながら、寛永検地帳の検討を試みよう。

最初の頁に記されている「中ノ村」以下の石盛は、太閤検地に画期をもたらしたと称されているところの、文禄検地の特徴の一つである村位別石盛による中ノ村の石盛を明示したものである。[3] この村位別石盛は村の日照・水利・交通等々の立地条件を考慮して、村位を上・中・下の三段階に分け、各村位ごとに上々～下々の田畑位ごとの石盛をし、さらに屋敷は村位に関係なく一石とするものである。これによって曲村は中ノ村に位置づけされていたことがわかるが、文禄二年のものと比すと、「田方」の「壱石五斗　上々」・「八斗　下々」がないのみで、他は全く同じである。寛永二年段階においても文禄二年時の基準がほぼ適用されているのである。

この中ノ村の石盛によって算出された曲村の村高は、表1に見るごとく三五七石七斗五升五合となっており、名請人は八〇名となっている。面積は三四町一畝二六歩である。

ちなみに、文禄二年においては、四三五石四斗九升五合となっており、名請人は六七名で、面積は四三町四反四畝一歩となっている。

次に階層構成をみてみよう（表1・2）。

最高の高持ちは内蔵介で三七石余、次いで宮内三六石余、藤右衛門三二石余と続く。この三人は断然、他を圧した高を名請しており、三人の持高を合わせると約一〇七石で、村高

表1　曲村名請人（寛永2年〈1625〉）

番号	名請人	請高	名請面積	田方高	畑方高	屋敷	屋敷高
		石．斗升合	町．反畝．歩	石．斗升合	石．斗升合	畝．歩	斗升合
1	内蔵介	37.978	3.58.06	29.906	7.322	7.15	750
2	宮内	36.362	3.33.03	26.442	9.220	7.0	700
3	藤右衛門	32.696	3.17.18	22.946	9.350	4.0	400
4	惣右衛門	23.473	2.14.0	14.478	7.925	10.21	1070
5	与市	22.558	2.13.18	13.592	8.446	5.06	520
6	源内	16.415	1.85.27	10.765	5.240	4.03	410
7	新右衛門	13.847	1.24.27	9.985	3.462	4.0	400
8	九郎	13.665	1.24.27	10.345	3.040	2.24	280
9	次郎左衛門	11.769	1.26.05	6.981	4.558	2.09	230
10	勘解由	11.122	1.02.24	7.730	3.392	—	—
11	甚右衛門	9.471	92.24	7.461	2.010	—	—
12	弥三郎	8.754	92.09	4.616	3.838	3.0	300
13	喜左衛門	7.199	67.18	7.199	—	—	—
14	市郎	6.366	66.09	4.132	2.094	1.12	140
15	総左衛門	5.643	50.12	4.803	840	—	—
16	作右衛門	5.304	48.18	4.884	420	—	—
17	孫九郎	4.424	53.18	2.056	2.098	2.21	270
18	六郎左衛門	4.329	33.09	4.329	—	—	—
19	おしの作右衛門	4.279	43.03	2.929	1.350	—	—
20	織部	4.220	36.06	2.600	1.320	3.0	300
21	つもり七郎	4.169	35.09	3.721	448	—	—
22	源介	3.630	32.06	3.168	162	3.0	300
23	光よし九郎右衛門	3.560	26.0	3.560	—	—	—
24	久八	3.528	25.06	3.528	—	—	—
25	おしの甚左衛門	3.266	15.03	3.266	—	—	—
26	源七	3.169	18.24	3.169	—	—	—
27	助左衛門	3.094	23.24	3.094	—	—	—
28	孫左衛門	3.055	23.15	3.055	—	—	—
29	主計	2.600	20.0	2.600	—	—	—
30	つもり又右衛門	2.471	18.21	2.471	—	—	—
31	助右衛門	2.458	19.03	2.458	—	—	—
32	つもり荷右衛門	2.452	19.12	2.452	—	—	—
33	つもり助左衛門	2.067	15.27	2.067	—	—	—
34	新ノ丞	1.936	18.27	1.170	766	—	—
35	みやさき源九郎	1.862	13.09	1.862	—	—	—
36	おしの助右衛門	1.736	12.12	1.736	—	—	—
37	荷右衛門	1.690	13.0	1.690	—	—	—
38	源五郎	1.641	12.09	1.641	—	—	—
39	宮さき右京	1.632	27.06	—	1.632	—	—
40	太郎衛門	1.602	26.21	—	1.602	—	—

番号	名　請　人	請　高	名請面積	田方高	畑方高	屋敷	屋敷高
		石．斗升合	町．反畝．歩	石．斗升合	石．斗升合	畝．歩	斗升合
41	助ノ丞	1.580	21.12	144	1.306	1.09	130
42	弥左衛門	1.522	17.21	737	785	—	—
43	つもり源七	1.482	11.12	1.482	—	—	—
44	宮さき総左衛門	1.446	24.03	—	1.446	—	—
45	おしの六郎	1.410	13.21	1.320	90	—	—
46	六郎	1.400	14.0	—	1.400	—	—
47	蔵介	1.338	22.09	—	1.338	—	—
48	ひらなし吉左衛門	1.260	14.0	1.260	—	—	—
49	孫右衛門	1.236	17.21	—	1.236	—	—
50	つもり雅楽	1.044	8.21	1.044	—	—	—
51	弥七郎	1.026	8.21	936	90		
52	惣三郎	910	7.0	910	—	—	—
53	つもり弥三郎	750	7.15	—	750	—	—
54	甚左衛門	736	7.03	286	450	—	—
55	つもり与介	716	9.15	—	716	—	—
56	左京	699	6.18	169	530	—	—
57	進ノ丞	672	8.12	—	672	—	—
58	甚五郎	650	5.0	650	—	—	—
59	弥市郎	640	6.12	—	320	3.06	320
60	惣市作　宮内	611	4.12	611	—	—	—
61	つもり与市	564	4.24	564	—	—	—
62	藤七郎	540	6.0	540	—	—	—
63	次左衛門	522	5.24	522	—	—	—
64	総九郎	440	6.0	—	440	—	—
65	つもり主計	390	3.0	390	—	—	—
66	おしの孫左衛門	384	6.12	—	384	—	—
67	つもり孫左衛門	378	2.21	378	—	—	—
68	又次郎	288	3.06	288	—	—	—
69	おしの甚五郎	282	4.21	—	282	—	—
70	与介	254	4.09	—	254	—	—
71	おしの市郎	240	4.0	—	240	—	—
72	宮さき太郎右衛門	180	3.0	—	180	—	—
73	おしの助二郎	171	2.18	45	126	—	—
74	源四郎	120	2.0	—	120	—	—
75	おしの善四郎	102	1.21	—	102	—	—
76	おしの新五郎	78	1.09	—	78	—	—
77	又二郎	63	0.21	63	—	—	—
78	助二郎	55	0.15	55	—	—	—
79	おしの惣三郎	54	0.27	—	54	—	—
80	みやさき藤七郎	30	0.15	30	—	—	—
	合　　計	357.755	34.01.26	257.311	93.924	65.06	6520

表２　曲村の階層構成

	階層区分	人数	請高	村高比	屋敷数
		人	石．斗升合	%	筆
Ⅰ	25石以上	3	107.036	29.9	6
Ⅱ	20石～25石未満	2	46.031	12.9	5
Ⅲ	15石～20石未満	1	16.415	4.6	2
Ⅳ	10石～15石未満	4	50.403	14.1	3
Ⅴ	5石～10石未満	6	42.737	11.9	2
Ⅵ	3石～5石未満	12	44.723	12.5	2
Ⅶ	2石台	5	12.048	3.4	0
Ⅷ	1石台	18	26.843	7.5	1
Ⅸ	1石未満	29	11.519	3.2	1
	合計	80	357.755	100	22

比約三〇％となっている。屋敷は内蔵介が二筆、宮内が三筆、藤右衛門が一筆を名請している。

第Ⅱ階層の二〇石以上二五石未満は二人で、名請高は合わせて四六石余、村高比は約一三％となっている。

第Ⅲ階層の一五石以上二〇石未満は一人で、一六石余である。

第Ⅳ階層の一〇石以上一五石未満は四人で、五〇石余、村高比約一四％である。

第Ⅴ階層の五石以上一〇石未満は六人で、四二石余、村高比一二％である。

第Ⅵ階層の三石以上五石未満は二人で、四四石余、村高比一二・五％である。

第Ⅶ階層の二石台は五人で、一二石余、第Ⅷ階層の一石台には一八人、二六石余であり、第Ⅸ階層の一石未満は二九人もの多さに達しているが一一石余で、村高比は三・二％である。

第Ⅷ・Ⅸ階層に属して屋敷を有している者は、恐らく他村にかなりの土地を有しているものと思われる。もしくは文禄検地帳に見られる如く木綿等の商品作物をつくっている者と

思われる。また表1・2だけでは明らかではないが、他村からの入作の者もいることを考慮に入れなければいけない。

なお、表3に見るごとく河成が多く、村全体の石高の一七・二%が河成となっている。

表3　河　成

	筆　数	面　積	石　高
	筆	町.反畝.歩	石
上　田	26	3.75.27	50.982
中　田	7	71.15	8.009
下　田	1	9.0	810
上　畠	3	17.3	1.710
下　畠	1	1.15	90
合　計	38	4.75.0	61.601

ところで、文禄二年から寛永二年まで三二年の間があるが、両方の検地帳に名前を出しているのが一七人ほどいる(名請人は、文禄二年が六七名、寛永二年が八〇名である)。表4は、寛永二年に姿をあらわしている者の文禄二年時の様相を

表4　文禄2年の曲村名請人一覧表

番号	名　請　人	請　高	名請面積	田方高	畑方高	屋敷	屋敷高
		石.斗升合	町.反畝.歩	石.斗升合	石.斗升合	畝.歩	斗升合
1	源内	29.102	3.13.10	14.086	14.589	4.08	427
2	作右衛門	28.679	2.28.24	13.049	15.630		
3	与市(一)	22.878	2.00.14	11.495	11.023	3.18	360
4	内蔵介	21.801	2.44.09	10.510	11.021	0.15 2.06	50 220
10	弥三郎	8.294	95.07	4.459	3.515	3.06	320
13	勘解由	7.168	75.28	4.008	2.840	3.06	320
16	甚右衛門	5.777	62.16	1.734	3.883	1.18	160
18	おりへ(織部)	4.625	42.12	2.572	1.947	1.02	106
20	与介	4.001	36.04	3.627	384		
23	源介(亮)	3.142	31.29	1.524	1.246	1.18 2.04	160 212
26	源四郎	3.106	24.12	3.042	64		
34	源五郎	1.890	17.20	1.890			
39	弥左衛門	1.547	14.20	880	667		
40	九郎	1.370	12.25	1.320	50		
43	六郎左衛門	1.140	10.00	1.140			
60	主計	408	6.12	48	360		
64	助二郎	173	1.10	173			
68	主無	132.820	13.29.04	126.975	5.845		
	合　計	435.495	43.44.12	292.406	133.609	67.23	6.780

(佐藤満洋氏作成)

示したものであり、表5は、それぞれの時期の番号(石高の多い者から順番を付した)を記したものである。同じ名前であるので同一人、もしくはその子供と考えられるので比較の対象となると思われる。内蔵介・与市・源内等をはじめとしていわゆる上位に存在する者は、村落上層部のものである。

表5　名請人の連続性

文録2年（1593）		寛永2年(1625)
番　号	名　請　人	番　号
4	内蔵介	1
3	与市(一)	5
1	源内	6
40	九郎	8
13	勘解由	10
16	甚右衛門	11
10	弥三郎	12
2	作右衛門	16
43	六郎左衛門	18
18	織部	20
23	源介(亮)	22
60	主計	29
34	源五郎	38
39	弥左衛門	42
20	与介	70
26	源四郎	74
64	助二郎	78

おわりに

文禄・慶長・元和・寛永の激動期を生き抜いた曲村の一七人の人々の実態は、検地帳だけでは明らかに出来ない。しかし、大友吉統(義統)改易直後の文禄検地を経て関ヶ原の合戦、

そして慶長期の検地が豊後で行われている。その後、寛永二年の検地が曲村で行われているが、これがどの程度の規模（豊後国全体かどうか）で行われたのか浅学の私は知らない。

小稿は、検地帳の、いわゆる定量分析のみで終った感がするが、何もしないよりも良いであろう。幸いにも渡辺澄夫先生はじめ多くの方々の御厚情により小生が写真撮影や筆写により収集した検地帳が数多くあるので、当分の間はその検討を行うことにする。

註

（1）佐藤満洋「文禄二年豊後国大分郡津守村内曲村御検地」、『大分市の文化財（第二十三集）』大分市教育委員会、一九八六年。

（2）拙稿「豊臣期、豊後国における〝乱取り〟について」、『日本史攷究』二三号、一九九七年。

（3）『大分県の地名』（『日本歴史地名大系』54）五九六頁、平凡社、一九九五年。曲村は松平領となっている。

（4）佐藤満洋「太閤検地における村位別石盛り制の研究㈠」（『大分県地方史五八号』）、一九七〇年。